

子育てとスポーツ

講師 さいき母親クラブ 会長
田中 志保氏

・プロフィール:

昭和44年、延岡市に生まれ、佐伯市に育つ。22歳の時から佐伯小学校の陸上の指導を担当、始めて20年近く。佐伯鶴城高校、日本女子体育大卒。佐伯市役所に勤務、子育て支援課を経て、現在都市計画課4年目。



ご主人、中2の長男、小4の長女と4人で、城下東町にお住まい。「さいき母親クラブ」会長4年目。

・体育の先生になるのがずっと夢でした

小学校と中学校ですべてバスケット部に所属、体育の先生になりたい一心で体育大学へ進学、4年間体育の先生になるために真剣に勉強しました。

しかし、戸惑いが生まれて、結果的に、地元に戻って家の近くで仕事がしたいということで、市役所の方に進むことになりました。

役所に入っただけのころ、佐伯小学校の陸上部の指導者がいないという話が市民課の先輩の方にきました。ちょうど新人で体育大学を出ているのがいるんじゃないかということで、お鉢が私の方に回ってきました。

学校を卒業して社会の経験もない22歳でどこまで何ができるか分からないままでしたが、とにかくやってみようということでお引き受けしました。

そんな道に進んだ私を見て、「この子ちょっと変わってる」というような扱いも受けたんですけど、私にとって「こんな楽しいことはないのに、何でみんなわかんないんだろう」というくらいに、やっぱり私ちょっとおかしかったのかなあと。(笑)

子ども達は、日を追う毎にだんだん慣れてきて、私が佐伯小学校の裏門から入っていくと、わーっと走ってくる。金八先生のオープニングみたいに子ども達が走ってくるんですよ。本当にこれ、夢みたいと思って、先生になりたかった自分にとって、いきなりこんな青春みたいな味わいが得られていいのかなって、とっても幸せな日々でした。

・子ども達は遊びや、楽しいことが大好きです

どういう風に指導すればいいのかなあって、もう色々なことを考えました。私自身、佐伯小学校の6年生の時の陸上部の監督さんが、いつも陸上を教えるというよりみんなでキックベースをやったり、ドッジボールをしたりで、すごく楽しかったイメージが強く残っていました。

そうだから行こう、とにかく、何か楽しいことをやる、子ども達を喜ばせようと考えました。

時に、仕事やストレスで、落ち込んで「今日はもう行きたくないな」と思う時もありましたが、ジャージに着替えていくと、子ども達が来て「今日は何するん？何して遊ぶ？」とか言われるともうそんなストレスなんかパーッとなくなっちゃうんですね。私も一緒に遊んだり走ったり跳んだりしてたので、指導していたというより遊んでもらってたという感じでとってもうれしかったです。

・簡単な分かりやすい説明をする

皆さんオリンピックの競技などで走り幅跳びを見たことがあると思います。着地ってお尻でスライディングするような、もう本当にぎりぎりまで、空中に浮いてる感じですよ。

「どれだけ空中にいる時間があるかな」という時間を一人ずつ、全部、ストップウォッチを使って記録を取りました。「できるだけみんな空中に長い時間いてね」というと、みんなぎりぎりまで跳ぼうとするので、その滞空時間を計ってやって、0.65、0.53と一人ひとり知らせます。子どもにそれを覚えさせて、その後こうこういうわけだけでできるだけ空中に長くいた方が伸びるから、今日は遠くに跳んだ人よりも空中に長くいた方が人が努力して頑張った人だからね、とやる。

3回くらいすると、0.1秒くらいポイントと変わるんで、賞めてあげる。まあ若干さっきより落ちたかなと思った時も、さっきよりちょっと伸びたねと、実際はうそを言ったりしたことあったんですけど、また賞めてあげる。

そうすると滞空時間が伸びて、着地のフォームがよくなるから、距離が30センチ、20センチ、個人的な能力の差はあるんですけど、相当飛躍的に伸びたんです。

この会場の一番前の席にいる彼、浅利善然君は、私が監督として入った当時、3年生でした。今ではこんな立派な青年になっているんです。多分ゲームとかそういうことばかりしていて、陸上につながるようなことを本当にしたのかなという思いもあります。

<浅利善然君>

佐伯陸上クラブ出身の浅利です。僕が部に入ったのは今から13年くらい前。一番思い出すことっていうのはやっぱり鬼ごっこか警どろを監督とやっていたことで陸上が好きだったというより、あの空間だったり友だちがいてみんなと走ったり遊べたりすることが楽しくてあそこに行っていたと思います。

僕も大学卒業して東京に行ってサッカークラブのコーチみたいなことを少しやりました。幅跳びをやった時間は計って跳ばしたりとか、走って声掛けとかっていうのは、本当に監督の背中と楽しい時間を過ごしていたとかやってくれていることがみなあったからだと思います。

僕が26歳で佐伯に戻ってきて、兄貴も佐伯にいて、この佐伯の思い出話をしよる中で、陸上の話も出てきてよく考えたら監督ってあのころ22、3歳やった。うちらと同世代。僕からはもっと大人に見えていたので信じられない。何て言ってもいいかわからないんですけどそういう佐伯の僕らのために生きてくれていた大人の背中を見ているからこそ、僕もこうやって戻って佐伯のために生きてみたいという思いを、決意を抱けたのかなと話を聞きながら今日思いました。

本当に監督からいただいているものを僕も子ども達のために佐伯のために還元していきたいなと思います。

<打合せなしの飛び込みの弁>

・子育てと合併の仕事

ちょうど合併の時でした。自分の持っている事務量が3倍くらいになって、10時までに帰れることがない日々が、続きました。

ある委員会に私は子育て支援課の担当者として行っただけですが、子育てに関わるメンバーが集まっている時に思いがあふれでて、自分の子育てができてないと泣いた記憶があります。

本当にいっぱいいっぱいの状態の時、娘はつらいお母さんの気持ちを一生懸命なだめようと、4～5歳の時に「お母さん大丈夫？」みたいな会話がなくて。おじいちゃんと一緒に職場の近くまで、自分ですごいぐちゃぐちゃなんですけどお弁当を作って、持ってきて「お母さん、これ食べて」と。私、すごくうれしくて「おいしいね」と泣いて食べてました。すると、それを毎晩のように届けてくれて、それがとってもうれしかったのをよく覚えています。

息子の方はやはり男の子、多感というかそういうお母さんに何かしようというよりも何か愛情が欲しくてたまらないんで、いわゆる問題行動。男の子同士のトラブルもあって、あちこちで頭を下げるようなことがとっても多かったです。

仕事でもくたくただし、子育てでそういう風な何か謝りに行くようなことばかりで、自分自身もいろいろなことがプラスに思えないような状況にどんどん陥ってました。仕事の夢を見て、朝起きたら、またそのまま仕事みたいな感じで、全然切り替わらなかったんです。相当つらかったんです。

「お母さんなんかもう、あなたのためにこんな風に怒られて」とみたいな、絶対言っただけじゃないようなセリフを息子に言ったりしてたんです。それを聞いたらまたパーンと怒って「もっと悪いことしてやる」とみたいなことがどんどん出てきて、今度はもう頭を下げるだけのつらさじゃなくて、行くところ行くところで「田中さんとこは、陸上の指導とか、人のお世話とかしているけど、あなた自分の子どもに愛情が全然いってないじゃないの」とみたいなおしかりを母として私一人が受けるようになって、何か消え入りたいとか言い返す言葉もない。

負のスパイラルで子どもにもいい影響が出てないし、だんなどもいさかが増え、お互い犯人探しみたいになって、レベルが低いんですけども、どういう風にクリアしていいかがわからない状態になっていました。

職場の方にも訴えて、いろいろな事情を考慮してもらって現在の都市計画課に異動してある程度状況が落ち着いてきたんですね。

・保健室デビュー

実際、息子にはひどい低血圧症状があったことも理由ですが、中学の入学式の時、うちの息子、式の途中で倒れて、保健室デビューでした。

中1の3学期程から、心身の成長のアンバランスや持病、色々な場面での葛どうだとか摩擦があったのでしょうか、徐々に学校へ足が運ばなくなってきました。

毎朝息子を起こすために優しい言葉をかけたり、怒って布団をはいだり、そんな状態を1時間程して、やっどご飯を子ども達に食べさせて、息子はまた布団の中に、娘は学校に行っただけで、私はそのまま仕事に。お昼に帰ってきて、また息子の布団をはいで、「行くぞ、行くぞ」と感じて、それでも行けない。私は昼食も食べないまままた仕事に戻るといったようなことが続きました。

そのような状態が半年ほど続き、ある時もうとてもしたたまれなくなって、うちの「さいき母親クラブ」の定例会の中で、自分の思いの丈やこういう状況になっているんですよという話をしました。

・みんなのやさしさに励まされて

その帰りに、その時のメンバーに言われた言葉が、「頑張ったね」「よく言ってくれたね」という言葉でし

た。私、救われたんです。本当につらかったんですけど、すごく楽になったんです。そこで何か吹っ切れたんですよ、私の中で。つきものがパッと取れて、「そうだ、そうだ」いるじゃないか仲間が。私一人で思っていたことを言ってしまったら何かすごく楽になって、それから私、前進できたんです。

いろいろネットで調べたり、いろいろな本を読んだり自分でできること、不登校に悩んでるんじゃないかって、何かできることをやることを探すこと。

やっぱりいろんな背景があったんだということもわかったし、そこに無理やり行かせることが本人にとってどうしてもつらいのであれば、少し距離を置いた所に置いて、今と違う環境に置くことも一つの方法だなということ。今、彼は福岡のフリースクール（全寮制）に行っています。

・フリースクール「玄海」

朝6時半に起きて、2キロ毎朝走って、そこで海に向かって「～している俺が好きだ」とみたいなことを叫ぶんです。カリキュラムの中に座禅があったり、徳育という人権的な勉強をしたりとか、勉強時間数は、普通の中学よりもずっと少ないんですけど、内容の濃い勉強をしたり。部活は水泳を選んで、毎日2キロ泳ぐんです。その方針でアクアスロンやトライアスロンだとかそういったものにどんどんチャレンジさせます。

人生には過酷な面がある、社会生活では理不尽なことも多い、口でどうこうと説明するじゃなくて体で体感させる。5か月がたったら体つきも何かたくましくなってきました。

この前夏休みに帰省した時に息子と夜通しずーっと話し、「本当に、これが私の息子なのだろうか」と思えるほど大人になっていました。

皆さんに息子の話をしてよいか本人に聞いてみました。すると「いいんじゃない！」と笑顔でOKをもらっています。

今、すごくいいですよ。親ばかですよ。。。(笑)

・母に捧げたい「よくやったよね！」

私が「子育てコーチング」で学んでるスキルの中で、相手の思いに気づいてあげる「承認」というのがあります。

私の母って、4人の子育てをしながら夜中3時、4時まで働いて若いころの全部をそれに費やして頑張ってきたから、今日この場でサプライズ企画として母にメッセージを送りたかったんですけど、なんと今夜は宴会が入って来れないということでした。

今日この気持ちを持って帰って母にしっかり伝えたいと思います。

「お母さん、頑張ったね、よくやったね」というのを言おうかなと思ってます。

まだまだ私、子育て奮闘中ですけど、皆さんと共にお互い悩み事を出し合いながら、一緒に社会でしっかり子育てができるといいなと思っています。

ご静聴ありがとうございました。

